

韓国次期大統領・尹錫悦氏が「政治報復」に転じる日

編集委員 峯岸博

2022/3/25 0:00 | 日本経済新聞 電子版

「新政権がまず手がけるのは、前大統領とライバルたちのスキャンダル」——。韓国の保守政権で大統領府の高官を務めた人物から聞いた言葉を思いだす。

5年ごとに大統領が代わる韓国では、政権初期に野党議員や前政権幹部による選挙違反やその親族の不正あっせんなどの捜査件数が増える傾向がある。

「反文在寅（ムン・ジェイン）政権の象徴」とされ、大統領選を制した尹錫悦（ユン・ソクヨル）氏のもとで保守政権がどのタイミングで、尹氏に僅差で敗れた革新系の李在明（イ・ジェミョン）氏や文政権に絡んだ不正疑惑の捜査に本格的に乗りだすかが韓国中で話題になっている。



尹錫悦次期韓国大統領は大統領選のさなかに李在明氏や文政権に絡んだ疑惑の捜査に関心を示した（10日、ソウル）＝聯合AP

まずは「協治」の姿勢から

当選直後の10日の記者会見で、李氏が京畿道城南市長時代（2010～18年）に手がけた都市開発事業をめぐる疑惑、いわゆる大庄洞（テジャンドン）疑惑の質問が早速飛びだした。だ

が、尹氏は「きょうはしない方がいいでしょう」とかわした。

歴代最小の0.73ポイントという保革二大候補の得票率の差は、韓国社会の分断の深まりを象徴する。18日公表の韓国ギャラップの世論調査によると、「次期大統領に望む点」で最も多かったのは「統合/国民の和合/協治」だった。尹氏が当選後、真っ先に「国民の統合を最優先に考える」と語ったのも、そんな民意を意識したからだ。

国会勢力図も尹氏に「独走」を許さない。6割近い議席を占める革新系の現与党「共に民主党」は新政権下でそのまま巨大野党に転じる。大統領が指名した首相や閣僚は国会の人事聴聞会で一人ひとり適格性が審議されるうえ、野党の協力がなければ予算関連を含むすべての法案は国会を通らない。大統領と議会第1党が異なる「ねじれ」が次期総選挙まで約2年間続く見通しである以上、野党との「協治」を探らざるを得ないのだ。

統一地方選勝利が新たな号砲

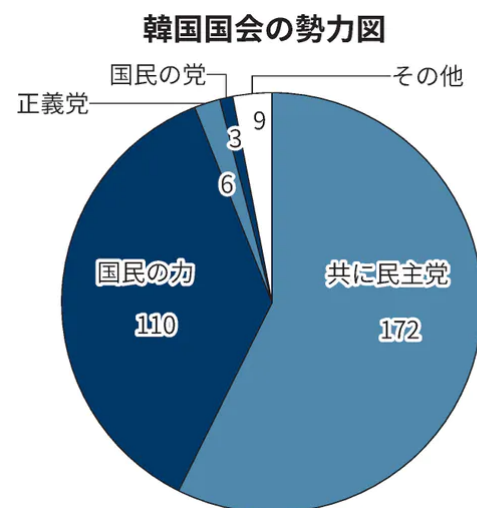
そうしたなか保守勢力は「3段階」での長期政権をもくろむ。

6月1日の統一地方選が「ホップ」、ねじれ解消に向けた24年の総選挙が「ステップ」、そして27年の次期大統領選で再び勝利し保守政権の長期化へ「ジャンプ」というシナリオだ。

最大のヤマ場は総選挙だ。仮に保守派が負ければ大統領の任期を通じた少数与党が確定し、尹政権は3年を残してレームダック（死に体）に陥りかねず、大統領選で革新派に政権が戻る可能性が強まる。それを防ぐために、いかに革新派にダメージを与えていくかを保守派は画策する。

約2カ月後に迫った統一地方選は尹政権下で初の全国規模の選挙だ。大統領選の勢いで保守政党が勝てば、4年前に革新派で染まった全国の首長や地方議会の地図は塗り替えられる。保守派が今後、全国規模で主導権を握るためには落とせない。

それを境に革新勢力が抱える疑惑の捜査も動きだすと保守派幹部は読む。「『報復はやらない』と言い続けながら、大庄洞疑惑や文政権下での各種選挙を洗い出して圧力をかけていくのだろう」。声を潜めてこう語り、「総選挙までの2年間で勝負だ。統一地方選から進歩（革新）との新たな戦いが始まる」と息巻く。



「李氏を動きにくくする」

最大の狙いは「李氏を動きにくくすること」だ。李氏は大統領選で47.83%の票を獲得し歴代の大統領候補の中で最も大統領のイスに近づいた敗者だ。年齢も57歳で5年後の「次」も十分に狙える。保守陣営には脅威であり続けるわけだ。

統一地方選ではとりわけ、首都圏の京畿道に注目が集まる。李氏が市長と知事を務めた大庄洞疑惑のお膝元で、しかも今回の大統領選では、尹氏が取りこぼした地域だからだ。今後の捜査の行方を左右する。



李在明氏が市長時代に手がけた大庄洞開発事業をめぐり保守派は追及を強めている（2021年10月、城南市大庄洞）

大統領選のさなか、尹氏は就任すれば李氏の疑惑捜査を続けると訴え、文政権に絡む疑惑についても、大統領は捜査に関与しないとしつつ「（捜査は）するだろう」と肯定した。「尹氏はまれに見る頑固。いったん口に出したことは曲げない」と周辺は口をそろえる。

李氏と文政権に絡む捜査は分離？

尹氏は検察総長の時代に、文政権の幹部が18年の南東部・蔚山（ウルサン）市長選に介入したとの疑惑の捜査中断を余儀なくされたことがある。検察改革などをめぐり文政権の曹国（チョ・グク）、秋美愛（チュ・ミエ）両法相と激しく対立し、捜査から外されたり、職務停止命令を発動されたりしたのも記憶に新しい。



2019年7月、韓国大統領府で文在寅大統領（左）から検察総長任命状を授与され、会談場へ移動する尹錫悦氏（ソウル）＝聯合・共同

一方で「当面は李氏をめぐる捜査にとどめ、文政権に絡んだ疑惑まで畳みかけることはない」との見立てが保守陣営からでている。革新派にまつわる各種の疑惑を一気に追及すれば、国民からも「露骨な政治報復」と非難を浴びるとの警戒心がある。

「報復」はもろ刃の剣

かつて「失敗した大統領」の烙印（らくいん）を押された盧武鉉（ノ・ムヒョン）氏は退任後に保守政権下で検察の捜査を受けて自ら命を絶ち、革新層の間でカリスマになった。近年の調査では歴代大統領中、信頼度で首位に浮上している。

盧大統領時代の秘書官で葬儀運営委員長も務めたのが文氏だ。保守勢力の間では「文氏や文政権にまつわる疑惑に対しては急がず、徐々に文派（＝文氏支持グループ）は無能だったというイメージを国民に植え付けて失望させていく」（保守系シンクタンク幹部）との陰謀論が流れる。

「選挙での葛藤と分裂を水に流し、国民が一つになるよう統合することが重要だ」。10日午前、当選が決まったばかりの尹氏に電話をかけた文大統領はこう促した。

そんな文氏は5年前に大統領に就くと、歴代保守政権の「積弊の清算」を最優先課題として突き進み、当選時の「国民統合」の約束はすぐに棚上げされた。

盧氏以降の2人の保守派の大統領は相次ぎ逮捕、収監された。歴史はまた繰り返されるのだろうか。

【関連記事】

- ・ [朴前大統領、地元ではなお人気 尹政権との距離焦点](#)
- ・ [韓国新旧政権が対立、大統領府移転や中銀総裁人事巡り](#)
- ・ [試練だらけの「初心者大統領」 韓国の尹錫悦政権が船出](#)

峯岸博（みねぎし・ひろし）

1992年日本経済新聞社入社。政治部を中心に首相官邸、自民党、外務省、旧大蔵省などを取材。2004～07年ソウル駐在。15～18年3月までソウル支局長。2回の日朝首脳会談を平壤で取材した。現在、編集委員兼論説委員。著書に「韓国の憂鬱」、「日韓の断層」（19年5月）。

混迷する日韓関係や朝鮮半島情勢を分析、展望するニュースレター「韓国Watch」を隔週で配信しています。登録はこちら。

https://regist.nikkei.com/ds/setup/briefing.do?me=B002&n_cid=BREFT033

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.